

正法

8 1980

心の友を求めて

菩提樹下に悟りをひらかれた釈尊は

一鉢を手にし 心の友を求めて

北に向って歩きだされた

千古の雪をいだいたヒマラヤは

白銀に輝いている

ガンガーの流れは変わろうとも

わが心は永遠に変わらじ

吹く風は冷たく 鉢は空しくとも

釈尊はひたすらに歩まれた

われ、今、釈尊にならいて

北に向って歩まん

心を許して語り合える友を求めて

ひたすらに歩まん

一人の友あれば

手を取り合いて

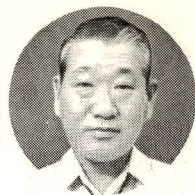
法のまえに泣かん

インドより帰って

目次

心の友を求めて……………	園頭広周……………	表紙
巻頭の詩（行為）……………	園頭広周……………	1
天職（高橋信次先生のことば）……………		2
法語……………		4
悟りに至る道 反省 ² ……………		8
特輯 釈尊は日本に生れていられた ³ ……………		17
正法会第一回インド仏蹟巡拝紀行 ⁴ ……………		42
紫水園日記……………	園頭広周……………	47
青年の広場（自由・平等・権利の美名にかくれて）……………		53
編集後記……………		56

巻頭の詩



行 為

思うことは

行為となつて

結果がある

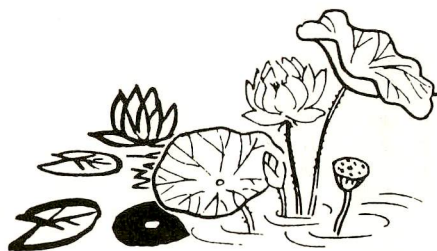
思うことだけでは

運命は変らない

運命を変えるのは

行為である。

その
園 頭 広 周
がしち ひろ ちか



特

輯

釈尊は日本に生まれていられた③

～正法を正しく嗣ぐもの～

霊眼で見た高橋信次先生

現在の世界でタダ一つしかない事実であるからその事実はウソであるという理論は成り立たない。物質科学は、仮定の上に立つて実験を重ね、同じような結果が出た時その仮定を法則として認めるという方法を取って発展してきた。その物質科学の研究の方法を心や霊の問題に当て嵌めて、同一現象に対して同一結果が出ないからそれは認めるわけにゆかないという考え方をして、ある一人の人の上に起つた霊的現象を「それは真実でない」といつて否定するというような考え方をしているが、しかし、タダ一つしかないから事実でないと否定するのはまちがいである。事実はあくまでも事実である。

例えば私が昭和十五年二十三才の時、中支の第一線で「宇宙即我」の体験をした事実は、私が終戦後宗教の世界に入っているいろいろな人に話をしてみたが誰も私と同じような体験をした人はいなかった。私がその体験を話すと、みんなはただ「ほう、そんなこともあるんですか」というだけであった。私はその体験によって「人間が神の子であり、また、神の生命の兄弟である」ことと「万物万生すべては神の生命の顕現である」ことを知ったのであった。私が接した宗教家で「宇宙即我」の体験をした人は一人もいなかった。誰も自分のこの体験をわかってくれる人はいないのかと探し求めてほとんど絶望していた時に、初体面の高橋信次先生は私の顔を見られたと

たんに「あなたは「宇宙即我」を体験しましたね」といわれたのであった。

私が靈道を開いた時に私は高橋信次先生がかつてインドへ釈尊として出て正法を説かれた方であつたことを見たのである。この事実は世界でただ一つの事実であつたとしても、ただ一つの事実であるからという理由だけで否定することはできない真実である。

インド当時と同じ修業をした



48年9月 奥志賀高原で
(この写真が告別式の時の写真となった)

昭和四十八年九月一日から十日まで、高橋信次先生が「インドの当時と同じような修業をしましょうか」といわれて奥志賀高原の竜王ロツヂへ行つたことがある。昼間は反省をして夜一時から三時まで山中に個々に散つて瞑想をするのである。離れたところにいられる高橋先生が念を發せられるとそれを私達がキャッチするという訓練もやつた。正しく受けることができた人もあればできない人もあつた。私はこの時に「反省」というもののきびしさとその方法を教えてもらつた。私が大牟田市の有明道場で教えている反省が、大和郡山の内観研究所で教えている内観と根本的に違ふのはこの時の体験によるのである。

高橋先生はすべての人の過去、現在、未来を見通すことができられる唯一の人であつた。私達が反省しているのを高橋先生は三つ向うの離れた部屋から心の眼で見ているのである。私達が反省していることが、私達の心のテープレコーダーに記録されていることと一致しているかどうかを離れた所から心の眼で見

ていられるのである。心の中だけで反省している分にはいいが、その反省を紙に書いて私に見せなさいと高橋先生にいわれると、すべて心の中は見透かされているとは知っていないながらも、この書いたものがいつどういうことで人の眼にふれるかもわからないと思うと、もしそのことを知られたら、もはや自分は生きているせいがないと思われような、誰にも知れたくない心の秘密はどうしても書く手が鈍ってくる。私にも心の秘密はあった。人からはあんなまじめな人はいないといわれてきた私にも心の秘密はあった。もしその事実がみんなに知られたとしたら、一ぺんに軽蔑されるであらうと思われるような秘密があった。そうした心の秘密も、すべて高橋先生に見抜かれているのであることは充分に知りつつ、書いても書かなくてもみなわかってしまつていられると思うのに、いざ紙にその事実を書くということには大きな勇気がいるものである。全く冷汗と脂汗が流れる思いである。反省はそこまで徹底しないといけないのである。

私は勇気を出して全部書いた。もしこれが人の眼に触れることがあつて、その人達から「今まで誠実な人だとばかり思つてきたのに、なんだお前はこんなこともやつていたのか」と、全世界の人々がこぞつて自分を軽蔑し、自分はタツタ一人孤独になろうとも、それが自分の過去の真実であるからどんなにつらく悲しい思いをしてもその批判は甘んじて受けなければならない。ありのままの自分を天日の下に曝して再出発すればいい。と私はそう思つて自分の心に偽りなく忠実に書いた。つらい思いをし冷汗と脂汗を流しながら勇気を出して書いていった。偽我が音を立てて崩れて行つた。その後から、いまだ嘗つて穢れたことのない真実の自己、神の子の自分が静かに顔をのぞかせてきた。それは丁度、旭が水平線から静かにさし昇ってくるような大光明に満たされた自分であつた。

日本の現在の諸宗教が、多少の現世利益的功德は与え得たとしても、真の魂の救いを実現することができなくなつてゐるのは、このような反省のきびしさを教えそれを実修させないからである。隠してみてもなんらプラスにならない過去の秘密を誰にも知られまいとして深く心の中にしまひ込んでいることなどむだでこれ位つらいことはない。

私が反省を始めて一時間位すると高橋先生が部屋に入つて来られた。

「あなた達の反省はだめだ、心のテーブルコーダーに記録されていることと違っているぢやないですか」
私はどきりとした。心の中を全部見通されているほどつらいことはない。

「Hさん、あなたは本当は喫茶店を十二ヶ所出していることになっていきますね」、それはきびしい重みのある言葉であつた。その言葉をはね返せる人はこの全世界にただ一人もないであらうと思われるほどの權威のある言葉であつた。普通多くの人に接していられた時の高橋先生は少しも気取らない気さくな話し方をされる人であつた。しかし一旦、天上界よりの靈の權威を以つて話をされる時の高橋先生は実にこわい人であつた。その權威の前には自然に頭が下がつた。

指を折つて数えていたH氏は「九つです」といった。「ちがいます十二です」また指を折つて「先生、やはり九つです」「ちがいます、よく思い出さない」、しばらくしてH氏が「先生やはり十二でした」といった。

「そうですね、あなたはいつも女の人を騙す時に喫茶店を出してやるからといっていましたね」

忠実に反省してよかつたとは思つた。もし偽りの反省をしていたら自分もH氏のように「あなたはこうでしたね」といわれたであらうと思うと自分の心に忠実であつたことをありがたと思つた。このようにして選ばれた一人として嚴格な指導を受けたH氏も、高橋信次先生が亡くなられて高橋佳子氏が「釈迦・キリストの教も必要はない。高橋信次先生の教も必要ない」といわれると、あつさり釈迦・キリスト・高橋信次先生の教を捨てて、メシヤを自称する高橋佳子氏について走つたのであるから、いかにこの肉体を持つての現実の修業がむづかしいかである。なぜ正法を否定する人について走つたか、その原因は正法を正しく伝え且受け嗣いで行く人達にとっては追究して置かなければならない大事なことの一つである。高橋信次先生の教を受けながら高橋先生に叛いて行つた人達の心理については別に書くことにする。

神によつて選ばれた人

九月三日、午前前半の反省の時間が終つたところへ高橋先生が入つて來られた。先生を囲んで座談をしてい

た時に私は心の中で高橋先生にあることを質問したいと思った。そのあることというのはつぎのことであつた。

「生長の家では心と病氣の關係を説いて、こういう病氣はこういう心の現われであると説いている。例えば首から上の病氣は目上の人に感謝が足りないか先祖の供養が足りないからである。眼が見えないのは見ようとする心がない暗い心を持っているからである。耳が聞えないのは聞こうとする心がないからである。生殖器、腰の部位の病氣は夫婦が不調和であるからである。足が立たないのは親、目上の人を立てないか、目下、部下の者を踏みつけにしているからである等と教えている。これは当っていることが多いのであるが生長の家の教がどういふものであるか余り知らないで生長の家にに行けば病氣が治ると聞かされて病氣が治りさえすればいいという単純な考えで初めて生長の家の個人指導を受けにきた人達に対して講師が、たとえば「わたしは子宮が悪いのです」といつてきた人に対していきなり「それはあんたが夫婦調和していないからだ。ご主人に対する感謝が足らん」といつたり、癌だという人には「それはあんたが頑固だからだ」と頭ごなしに叱りつけるような調子でその人の欠点をえぐり出すような方をするのである。その人が帰ると外の人に向つて「あの人はあんな心を持つているからあんな病氣になるんだ」といつたりする。するとそれが廻り廻つてその人の耳に入つたりする。そんなことが多い為に、「生長の家に رفتら悪口いわれた」とか「生長の家の講師は人の悪口を宣伝する」とかという声がかなりあつた。

人を救わなければならないのに「心の法則」によつて人の心を傷つけてしまつて、また講師は「心の法則」「心と肉体との關係」によつて人の欠点弱点をえぐり出すことが上手な講師がいい講師だというような考え方が支配的であつたので私は、どんな人の罪も赦されて救われてゆく愛のあたたかさが生長の家にはなかつたので、今の生長の家のあり方が正しいのか、それとも愛のあたたかさによつて救わなければならないという自分の考え方が正しいのか、それを高橋先生に聞いてみたいという心を心の中に起したのであつた。

そのことを私が心の中に思つたとたんに高橋先生は禪定の姿勢に入られた。「いまここにキリストが来ています。園頭さんが今、思っていることに対しキリストはこういつています。「心に愛のない人に「心の法則」「心と肉体との關係」を教えてはなりません」と

私が思っていることが正しかったのである。生長の家はアメリカの精神身体医学を採り入れて、「心と肉体との関係」を説いてきた。生長の家がそのことを説き出した頃は日本の医学界は生長の家は迷信を説くといって反対していたが昭和四十年以後から現在に至ると、日本の医学界も病気の大半は心によって起るのだということを認めなければならぬようになってきた。高橋信次先生も病気は心によって起ると説いていられる。だから生長の家が「心の法則」を説いていることもまちがいではない。私も「心の法則」を知って生長の家時代に沢山の人の病気を治してきた。明日入院して手術しなければならぬという人がひと晩でよくなったこともあるし、子宮癌が治つたとか、小児麻痺が治つたとか数えあげればきりが無い。「心と肉体との関係」を知ったことによって、それによって人の心を精神的に切り審いてその人の欠点をえぐり出すようなやり方は本来の宗教的でありかたに叛いているのである。

高橋先生が常に講演の中で「精神分析によって人が救われることはない」といつていられたことは宗教の講師も精神分析を専門としている精神医も、もつと真剣に考えなければならぬ問題である。現に精神分析学会で常に問題になっていることに「精神分析の仕荒し」の問題がある。

「精神分析の仕荒し」というのは、その人の病気の原因はどこから来たのであるかとその原因をずっと掘り下げて年令を幼少期に遡って追及して、その人の心の秘密まで探り当ててそれを白日の下に曝して行こうというやり方である。原因がわかれば病気は治るというのである。一見してこのやり方は私達が説く反省と似ている。しかし、精神分析と反省が根本的に違ふところは、精神分析はその原因を探り当てた時に今まで忘れかけていた過去の劣等感、罪悪感が浮き彫りにされても、その劣等感、罪悪感をどう処理したらいいのかを精神分析医は知らないから、劣等感、罪悪感を思い起さされてしまったその人はその劣等感罪悪感の故にそれを処理できなくて苦しむということになる。こういう心理的状态の行きづまりを「精神分析の仕荒し」というのである。掘り起された劣等感、罪悪感をどう処理するかを教えるのは宗教の仕事であるが、その宗教が精神分析医達としてはならないといっていることと同じようなやり方で指導を求めてくる人達の心を切り審いてその人の心を暗くし、講師達は心の法則によって人の心を審いて、自分の心を審きに満ちた愛の一カケラもない状態にしてしまつて心を暗く

しているというのが現状である。

キリストは高橋先生を通して「愛のない人に心の法則を教えてはならない」と教えて下さった。

私が最初に見た高橋先生は釈尊の姿であつた。今、眼前に現われている姿はキリストであつた。釈尊は天眼通、天耳通、他心通、宿命通、神足通、漏尽通の六神通力を持っていられた。

天眼通——天上界、地上界、地獄のすべてを見る力

天耳通——どんな世界の人、物の声をも聞くことができる力

他心通——人の心を全部よみ取る力

宿命通——すべての人の過去、現在、未来の運命を知る力

神足通——どこへでも行つてみてくることができる力

漏尽通——一切の煩惱をなくして、為すことそのまゝが仏の行いである力

創価学会本部のある幹部が創価学会に疑問を持つて高橋先生の所に來られたことがあつた。高橋先生はつぎの通りにいわれた。

「あなた方の池田大作会長は、今ハワイのロイヤルホテルで創価学会の組織改革について話合つています。このことはあと三日して聖教新聞に発表になります。ところであなたは、あなたが私の所に來たということが原因で創価学会本部を誠にになります」

その人が高橋先生をたづねたということが密告されてその人は本当に誠になつた。そこで高橋先生は池田大作会長に手紙を書かれた。

「あなたも宗教家として仏の慈悲といつていながら、○○氏が私をたづねて來たというだけでなぜ誠にされるのですか、○○氏には妻もあり子供もあります。自分の部下を露頭に迷わせるようなことをしていてそれが慈悲ですか○○氏を復職させなさい。復職させないなら私にも考えがあります」

○○氏は復職されたが左遷された。

田中角栄氏が首相の時、贈収賄問題で首相を辞めるかどうかという時である。田中首相の跡に誰が首相になる

か混沌として政局がわからない時に、田中首相の出身地である新潟県の責任者が「田中首相はどうすればいいか」を聞きに來られた。この時のことは高橋先生が私に録音して置きなさいといわれて録音してあるのでそのまま書く。

「田中さん、あなたは裸になりなさい。持っている財産を全部投げ出しなさい。そうすれば国民はもう一度あなたを首相にというでしょう。」

しかし、自分が裸になっただけではいけません。

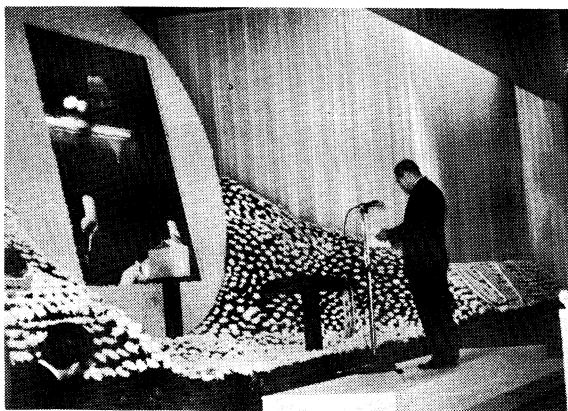
「社会党の成田君、共産党の宮本君、ぼくは裸になった。だから君達も裸になれ、お互いに裸になったところでこの日本をどうするか、国家百年の大計を話合うではないか、君達は労働者の味方だといっているけれども結構豪華な生活をしているではないか。共産党の宮本君、君も豪邸を建てたではないか。元総評議長の太田薫君、君は労働者の味方だといっているけど君も労働貴族である。田中さん、日本のために勇気を振って裸にななさい」

田中首相がやめたら後は福田赴夫氏が本命とされていて、三木さんが首相になるとは誰も考えていなかった。それが突然椎名悦三郎氏の寝業で三木さんが首相になったのであったがその改変劇の始まる前に私達は高橋先生から「天上界で三木さんにすることに決まった」ことを聞かされていた。

田中首相は高橋先生の忠告を聞かなかった。もし田中さんがこの忠告を聞いて裸になっていたら自民党も浄化されてKDD、浜幸、ロッキード問題なども起らず、自民党の浄化は野党にも大きな影響を及ぼしてきれいな政治が行なわれるようになっていたであろうと残念でならない。

すべての人の心を見通す力を持った人が一人あれば日本も世界もよくなると小さい時から思ってきて、昭和四十八年三月にやっとただその一人の人に廻り会えたのであったが。その人ははや亡くなつてしまわれた。残念なことである。

高橋先生がどんなに正しい教を説き指導をされても、それを聞いて実行するかしないかは関係を持ったその人自身の自由意志に委ねられるのである。田中首相は高橋先生のいわれたことを聞かなかった。それと同様に高橋



告別式で感謝と誓いの言葉を述べる筆者

先生の教を受けた者が、それを正しく信ずるかどうかはその人自身の自由意志なのであって、高橋先生の教えを受けた人達の中から高橋先生の教は信じないという人が出てきたとしてもそれは高橋先生の罪ではない。

正法を正しく嗣ぐ者は、正法を正しく嗣ぐ決心を持っている者が嗣ぐのであって、法は法によって伝えられるのであって血縁によって嗣がれてゆくものではない。私が高橋先生が説かれた正法を正しく嗣いでゆくことを宣言した時に、いち早く正法会員になって下さった方には、正法を正しく嗣ぐ資格のある霊の次元の高い方であるといえるのである。これからも心ある人々はぞく／＼と集まって下さるのである。

高橋先生はよくいつていられた。

「釈迦が肉体を持った時はキリストが天上界から指導することになっているし、キリストが肉体を持った時釈迦が天上界から指導するのです。釈迦の教とキリストの教が同じであるのはそこに原因があるのです」

まさしく私はそれを眼前に見ているのである。

「愛のない人に心の法則を教えるはなりません。心の法則は人が愛の心を持った時に教えないさ」

私がこの八月号から「法語」という形で心と肉体との関係を書き始めたのは、この時のキリストの言葉に随って、正法会員の皆さんは充分に愛の尊さ、心のあり方を知って下さったと思うからである。

私一人の心の中の疑問に対して、キリストを通しての言葉を聞いているうちに私の頭はその權威の前に自然に下がった。それは

もはや頭を上げてなどはいられない全く自然なものであった。上げようと思っても上げられるようなものではない。霊の權威、霊の重庄であった。言葉が終つて私は頭を上げようとした。

生長の家の中にあつても妥協せず、自分の心に忠実にあり通してきたことが正しかつたことが実証されて自分で自分を愛しく思い静かに頭を上げようとした。そのとたんに私の頭は今度は押しつけられるようにして私は顔を畳にすりつけていた。言葉が胸の奥から迸り出た。頭は畳にすりつけているのに私の心眼は高橋先生とその背後にある釈尊とキリストを通してはるか彼方からとていいか、はるか上からとていいか目も眩むような神の光りを見ていた。

「神よ、この偉大な方を今、この世に下したまいて、われらの心の光りとなさしめ給ひしことを感謝申し上げます」

肉体を持った私は高橋先生の前にぬかづいてゐるが、私の心は高橋先生の心と神の光り（神の心）とが一つであり、神の光りが肉体を持つ姿となつて、この現象の世界に現われてくるのはすべてそれは神の慈悲なのであることを知り、地上世界で正法が説かれるのはそれは神が全人類を救はんがための神の愛であることを知つたのであつた。

世界の歴史を少しでも学んでいる人達は、洋の東西を問わずすぐれた宗教家がほぼ同時代に世に出ていられることに驚いてゐる。釈尊が出られたのと時代を略同じくして中国に孔子、孟子が、ギリシヤにソクラテスが出ている。これらの方々が説かれた教は二千五百年経つた今でも全世界の人々の心の中に生きている。これらの方々の跡をうけてキリストが出られた。それは決して偶然ではなく、神の民心による神ご自身の慈悲によつてそれらの方々が光りの天使として出世されたのであつたことを私はこの時に知つたのである。

私は釈尊やキリスト、高橋信次先生の背後にある神の民心を少しばかり知つたのである。この地球を理想世界にするための計画は神から來ているものであることを知つたのであつた。八人一緒に行った中でそのような体験をしたのは私一人であつた。宇宙即私の体験もであるがこのような体験も八人の中で私一人であつたとすればこの事実も私が書き遺して置く以外に誰も書き遺すすべはないではないか。

神と釈尊とキリストと正法

私は私が過去世で舍利弗と呼ばれガブリエルと呼ばれたことがあった記憶の中から、神の慈悲は正法となつて釈尊、キリストにより、そうして現在高橋信次という名を以つて説かれていることをはつきり知ることができた。釈尊やキリストの教は必要はないといつてゐることは即ちそれは神をも否定するものであることを知つてゐるが故に私はミカエルと称する高橋佳子氏に反省を求めたのである。神を信じ正法を信じ、正法を説かれる使命を持たれた光の大指導霊を尊ぶ私の心は一貫して變らない。

一貫して變らない私の心を中心として多くの人々の心はくるくる變つた。

昭和五十二年三月 高橋佳子氏はミカエル宣言をして「釈迦、キリスト、高橋信次先生の教はまちがつてゐる。これからミカエル佳子が全人類の救世主となるのである」といつたことに對して私は當時の関西本部長中谷義雄氏と共に反省を求めた。既に全国的にGLAを脱退する人達がふえてきた。六月になると三宝出版社長であつた堀田和成氏が脱退された。八月になると高橋一栄氏が福岡の私の所に来て「佳子のまちがいを許して下さい。反省してゐます」と謝まれ、一旦やめていられた堀田和成氏も復職して高橋信次先生の在世中と同じようなGLAにしようということになり九月に二回最高首脳者会議が持たれ、十月になると高橋佳子氏と高橋興和、関芳郎氏の三人が私の所まで来て、今までGLAを混乱させたことを謝まるということになった。関西本部の中谷義雄氏から電話が来て「そのようにさせることに話が決まりましたから」ということであつたので、「わざわざ福岡まで来てもらわなくても、そのような反省があつたのであればその反省の通り高橋信次先生の教を歪めないようにしてもらいたい」と返事した。ところが反省したというのは全くのウソであつて四十五才以上の人と宗教

遍歴をしてきた人はGLAをやめさせるという方針を決めて我々年輩の者をやめさせるという方針を執つてまず関西本部長の中谷義雄氏をやめさせるという戦術を取り、私に對する排斥運動は高橋興和氏が直接東京から電話で福岡の者に指令するということをやりはじめた。一旦復職を決意された堀田氏は再び三宝出版社長をやめ、中谷

氏も関西本部長をやめられた。中谷氏の跡を継いで関西本部長になった岸田守氏は「関西本部もGLAを脱退して園頭先生と一しょに高橋先生の説かれた正法をやってゆきます」と何べんも約束してその時はご指導をよろしくお願いしますといつていたのであったが、五十四年一月、GLA関西本部会報に「関西本部はミカエル佳子先生を立てて行くことに決心しました。これまでGLAをやめて行つた人達は、ミカエル佳子先生の広い大きな豊かな愛を知らないからである」という新年の挨拶を発表した。

GLAをやめて行つた人達が悪かつたのであるという書き方であつたので、「GLAをやめた人がなぜ悪いというのかその理由を説明せよ」と岸田氏に迫つて関西本部の全支部長に私の見解を発表した。

「私は一貫して釈尊・キリスト・高橋信次先生の教えを守るのである。関西本部はなぜ「釈迦・キリスト・高橋信次先生の教は必要はない」という人を支持するのであるか、毎月高橋先生が関西本部で講演された恩をあなた達は忘れたのか」と。

私が見解を発表したことに驚いて岸田本部長は私の所に駆けつけてきた。

「失礼しました。実際は私達は高橋先生の教を信じて行きたいと思つているのですが、関西本部はミカエル派がうるさいのであ、書かないと仕方がなかつたのです」といった。

世の中には妥協してすまされることと、すまされないことがある。政治は妥協の世界であるから時に主張がくるくる変つてもそれは当然である。しかし、神理を説く宗教の世界では妥協は許されない。全人類が救済主として仰いでいる釈尊とキリストを信ずるか信じないかは妥協の余地はない。釈尊・キリストは必要はないと説いている指導者に、釈尊・キリストを信ずるという人達がいつてゆくということは全くの矛盾である。

五十四年四月、ミカエル派の青年達を使喚して中谷義雄前本部長の排斥運動をやらせた林正氏を私は福岡へ呼んで反省を求めた。高橋信次先生のご恩は忘れません。といつていたので正しく善処するのかと思つていたらミカエルを信ずる青年達を引きつれて関西本部を脱退したということ聞いた。新大阪駅の近くに事務所を持つて京都第二出張所という名称を掲げているというのである。

ミカエル佳子氏を立ててゆくという声明をした関西本部から、ミカエル佳子氏を立てるといふ人達が脱退した

のである。全くおかしいことが起っているのであるが、同じ指導者を立てるといふ人達がこのように分裂してゆくのをもそのまま認めるGLAもおかしいが一番おかしいのは関西本部の態度である。

ミカエル佳子氏を立てて行くと宣言をした直後に、ミカエル佳子氏を立てて行くといふ人達を切り離してしまつたのである。

関西本部が二つに分裂して、東京のGLA本部から来る講師が^{みと}弥刀にある関西本部で話をする時はこの頃は正法の話をするというのである。するとそれを聞いた会員の人達は「佳子先生が正法に帰られた、GLAもよくなつた」といつて喜こんでいるのだそうである。そうして園頭先生が関西本部で話をして下さらないだろうかという話をしていふというのである。よく聞いてみると、関西本部で「正法は……」といったその講師は、京都第二出張所の林正氏の方のグループで話をする時は依然として「ミカエルは……」という話をしていふのである。

私はそれを聞いたから、GLAの東京の講師が関西本部で「正法は……」という話をするのは、関西本部がGLAを脱退したら、GLAがつぶれるから関西本部をやめさせないための手段にしかすぎないと思つた。信念もなく手段としてのいい加減な話を聞いて感心している人が多いのは全くあきれたことであり、私が関西本部で話をするのは、関西本部がGLAを脱退して「正しく高橋信次先生の正法を学んで行く」といふことを宣言してからである。

GLAがいつれ反省しなければならぬ日が来ることは早くから私が正法誌の中で声明して置いた。「この頃佳子氏もよくなられました」といつていふことは、それを裏返しすると「今まではまちがつていました」といふことになる。だから「よくなられました」といふいい方をするといふことは「まちがつていた」といふことを宣言するのと同じである。

本当にまちがつていたといふ反省をしたのであつたらつぎのことをしなければならぬ。

一、GLA誌にこれまでのことはまちがつていたとの謝罪文を公表すること。

二、まちがいによつてGLAを混乱させたことを各地区、各県代表者達に謝まること。

三、今までまちがったことを説いてきた講師達は、自ら責任を取って再び講師にはならないことを宣言すること。（正しく正法を伝えることの責任の重大さを考えたら、このことは当然である。正法会の会員は最初から正法をまちがえることはなかったのであるから、今頃になって漸くまちがいに気がついたとしたら、まちがったことに気づいたGLAの講師が、最初からまちがわない正しい人達の前に講師として立つことはできないのは当然である。）

自ら責任を取る勇気のないものは人の前に立つことはできないのではないのか。

高橋信次先生は生きていられる

今から二千五百年前、釈尊がクシナガラで亡くなられた時、弟子の中の一人が

「人の心を見通す大沙門が生きている間はなんにもできなかったが、大沙門が死んでしまったのもうなにを考え、なにをしてもよくなった」といった。

もし釈尊が生きていられた時に弟子がそうだったのであつたら釈尊はなんといわれたであろうか。

高橋信次先生は

「わたしは釈迦・キリストの教の原点を明らかにするために生れてきた」といつていられた。その高橋先生が生きていられた時に講師達が

「釈迦・キリストの正法は知らない。高橋先生の教はまちがっている」といつたとしたら高橋先生は黙つていられたであろうか。

高橋先生の肉体は既がないが、私は霊の存在がわかっているのでいつでも高橋先生の心にそうように心掛けている。



48年9月 山中の禪定の合い間に
左から二人目が筆者

亡くなられたからなにをいってもよいと考えている人達は霊の存在がわかっている人である。霊の存在のわからない人、信じられないという人は正法を正しく知る資格はない。いろいろなことで私が正しく主張するのは、高橋先生の弟子の中で一番の長老は私であつたし、私がまちがえれば正法が正しく伝わってゆかないからである。

四十八年四月、私は自分が過去世で舍利弗であることを思い出した。高橋信次先生が釈尊であつたことを知った。仏典の中には舍利弗は釈尊の右腕として智慧第一であり、時には釈尊の代りに法を説いたということが書かれている。その舍利弗の生れ変りであることの自覚を持っている私が「釈尊の教は必要はない、釈尊の教はまちがっている」という人についたとしたら一体どういふことになるであろうか。

「あの舍利弗という人の生れ変りだつたという人はニセモノに違いない。舍利弗だつたという人であつたら「釈尊の教はまちがっている」という人について行く筈がない」と誰しもが思うであろう。

私がまちがえると、高橋信次先生もニセモノであつたことになる。

高橋先生がニセモノであつたことになるが高橋先生が書かれたものも一切まちがいということになる。しかし、私が霊眼で見たのはすべて真実である。正しく正法を伝えようとしている私の周囲にはつきつきに奇蹟が起っている。それだけでなく正法を聞かれた人達がつきに伝えられるとそこにも奇蹟が起っている。現象的なそんな奇蹟よりもみんなが心を安らかにして悟りを開いてゆかれる。そうした札状が毎日来る。

高橋先生と四十九年十月、第二回目に奥志賀高原に行った時

「園頭さん、ぼくは今のGLAはつぶしてもかまわないと思っています。東京本部の講師達は少しも勉強しません」といわれたのであるが、私が東京の講師達と同じように力のない勉強をしない人間であったとしたら、私にこんなことはいわれない筈である。外の人にでなくて私一人にいわれたということは私に期せられるところがあつたからであると思う。このことは、「GLA東京本部はだめになっても、園頭さん、あなた一人はしっかりと正法を守って下さい」ということを言外にいつていられることにならないのであろうか。

高橋信次先生の心を一番よく知っていたのは私であつた。だから私は一人になつても正法を守って行くことを誓つたのである。

私達はこの三月のインド仏蹟巡拝の旅で、ガイドのAさんとその仲間に感化を及ぼすことができた。五月二十一日、東京巢鴨信用金庫の講演会場へ、「さつき五時に成田に着きました」といつて駆けつけて来てくれて、六月一日長崎、二日熊本、三日別府、四日福岡と来てくれた。Aさんは私達とはじめてのつき合ひではないという気がする。心が非常にさわやかだというのである。いろいろな宗教家達がインドへ行っているのであるが、ガイドをしている短かい時間で正法会のようにインドの人の心をとらえてはなさなかつた団体はなかつたのではなからうか。こうしたことも私が、かつて釈尊であつた高橋信次先生の心を忠実に生かしたいと思つているその心が通じたのであると思つている。

高橋佳子著「真創世記」とミカエル・ウインクス

GLAは若い講師が若い者だけを指導するものであるということで、ミカエル・ウインクスと称する講師団が結成され、ミカエル佳子氏を守つてゆくという誓いを立てた。真創世記地獄篇が祥伝社から出版された時、私にも一冊送つてきたが最初の四・五頁をみたただけであとはよまなかつた。その頃既に混乱が起つたいる真最中であり、東京のある人から真創世記はミカエルウインクス講師団が、スエーデンボルグやその他の外国の靈界体験記から

捨い集めて、あたかも佳子氏が一人で書かれたようにみせかけたニセモノであるといううわさが伝えられてきた。ミカエルウィングスの六人の執筆者とはつぎの人である。

平井和正 SF作家「人狼白書」などの作家

高守益次郎 元週刊エコノミスト編集長

波場武嗣 元キリスト教牧師

(以上の三名は既にGLAを脱退している)

関 芳郎 GLA講師

増本 瞭

高橋興和

高橋佳子氏が増上慢になってミカエルを宣稱しはじめたのは、SF作家の平井和正氏がGLA本部に出入りするようになってからであると佳子氏の母親である一栄氏はなげいていられたことがある。その平井氏は、佳子氏を小松左京氏に売り込んだりしたので佳子氏は、私の後ろには小松左京氏がついていると大いに宣伝したものである。小松左京氏が果たしてどこまで佳子氏の霊能を信じていられるかは疑問である。佳子氏が地獄篇を出版するという時、三宝出版から出すべきではないかという話があったが、結局平井氏の紹介で祥伝社から出版するということになった。

平井氏の叔父という人が正法会員になっていられるが、平井氏はGLAに関係していたのではメシが食えないということでGLAをやめたという話であった。高守氏がGLAをやめる時ある人が、「地獄篇は六人で書いたという話ですがほんとうですか」と聞いたら、「それはかんべんして下さい」といつて逃げたというのである。

もし書かなかったのであるならば高守氏ははつきりと「書きません」といい切れる筈である。それを「今はいえませんが、聞かないで下さい」といったということは、書いたのだと断定してまちがいないのではないのか。波場氏は「ミカエル佳子先生のすばらしさは、キリストは足下にも及びません。私の家内は私よりすばらしいのです。私は最初はどうかと思っていましたでしたが私の家内が、「お父さん、ミカエルを信じられないなら私を離縁して下さい

い」と涙を流しているので私も信ずることにしました」という話を全国でして歩いた人である。

本当に正しい霊能があるのであったら、その三人はG L Aをやめる筈ではないのではないのか。

私は佳子氏が五年三月に霊能もないのに「ここにガブリエルがきております」と詐つて霊能があるようにみせかけた詐術を見破っていたから、真創世記が出版されてもそれはどこからの借用引用であり佳子氏自身のものではないということを見破っていたから、どういふ書き方をしてあるかと最初の四・五頁を見ただけで捨てた。そうしたらミカエルウイングス六人の合作だという噂さが流れてきたのである。そのうちに前記の三人がG L Aをやめた。

佳子氏がすばらしい霊能力者であるかのようにみせかけるための芝居であつたのである。ある人から佳子氏の原稿のコピーが送られてきたが、確かに佳子氏の筆跡とは全く違う字が沢山あり、消したり書いたりそれは汚ないものであつた。私が書くものは私が知っているままを書くのであるから、ペンで一ぺん書くだけで消したり足したりほとんどすることはない。印刷する前の校正の段階で多少言葉遣いを改めるくらいで全くきれいなものである。私の原稿がきれいであることは印刷屋が驚いている。一枚の原稿にその人のものでない他人の字がいくつも入っていることはその人だけのものではないと考えていいと思つて私はその原稿のコピーを見た。

何人で誰がどの部分を受持つて書いたかは私は深く穿索する必要はないと思つていた。問題は佳子氏に霊能があるのかないのかということである。私は佳子氏が真創世記に書いてあるような天上界や地獄界を自由に見てくることができる正しい霊能力を持っている人であつたとしたら、釈迦・キリストの教はまちがっているといふ筈はないと思つていた。しかし事實は、「釈迦・キリストの教はまちがっている。釈迦・キリストは人間が幸福になる道は説かなかつた」といつたのである。

四十八年九月、私が見た釈尊とキリストは神の光りそのものであつた。私は自然に頭が下がつたのである。そうした体験からして私にはとても釈尊・キリストの教はまちがっているとはいえない。釈尊・キリストの教がまちがっているという人の霊能が正しいものであるとは私にはとても思えない。釈迦・キリストは万人の救いを説かれた。ミカエル佳子氏は釈迦・キリストの教を正しく信じようとする多くの人達を「サタン」と呼んで排斥し

たのである。そうして今もGLAをやめて行く人は後を断たない。私がミカエル佳子氏に反対し、真創世記を偽作であるというのは、私が神の光りを見、釈尊・キリストがまた聖なる神の使いであることを見ていたという根拠があるからである。引用であるのであればその典拠を明示すべきである。引用であるものを自分が体験したものであるかのような書き方をしてあるところに問題がある。

私がなぜここに真創世記の問題を取り上げたかという、今でも真創世記を書店で買ってよんだという若い人達から電話がくるのである。その内容は、「佳子先生の霊能によって自分の運命を見てもらいたい」とか「恋人との相性がどうかを聞きたい」というなどである。真創世記をよんだ人達は佳子氏を正しい霊能者だと信じているのである。今後祥伝社が真創世記の出版をつづける限り佳子氏の霊能を誤まって信ずる若者達がふえてゆくということになる。

私が正法誌にこのことを書いて置けば、一時は誤まって信じた人達も、そのうちにまちがいに気づいてゆくであらうと思うからである。一番よいのは、真創世記は佳子氏の執筆でなく六人の合作であるとうわさされるうちの平井、高守、波場というGLAを既にやめている三人が真相をはつきり告白すれば一ぺんでこの問題は解決することになるが、この三人は真相を発表する勇氣は持つていないようである。真相は発表しなくてもこの三人がGLAを脱退したということが、すべて佳子氏のことはウソであったということを証明していることになってい

るのではないのか。後は皆さまの判断にお委せする。

おわりに

昭和四十三年十一月二十三日、高橋信次先生は悟りを開かれて五十一年六月二十五日昇天されるまで、その活動期間は足掛け僅か九年にしか過ぎなかった。その間、講演を聞き著書をよんだ人達は誰いうとなく「高橋先生はお釈迦さまの生れ変わりではないのか」と囁かれるようになり、「そうだ」と信ずる人も多くなっていた。ところが高橋信次先生が昇天されると、未亡人の一栄氏と長女の佳子氏と弟の高橋興和氏は、夫であり父親であり兄

であつた高橋信次先生の教はまちがつているといい始めたのである。東洋には「死して三年改めず」という道徳がある。子供は親のやつたことがまちがつていたとしても、その親が死んでも三年間は親のやつたことを改革してはならない、それが親孝行であるという考え方があつた。「死して三年改めず」という言葉は知らない人でも親が死んだからといってすぐ親のやつたことを改めるということはしないものである。ところがこの場合は高橋信次先生が亡くなられて一年にもならない間に、「わたしの夫、わたしの父、わたしの兄のやつたことはまちがつていた」といい出したばかりかその上に「釈迦・キリストの教もまちがつている、必要はない」といい、未亡人と弟は共謀して、娘であり姪である佳子氏をメシヤに仕立て上げるといふ芝居を打つたのである。そのために高橋信次先生の教を信ずる人、釈迦・キリストの教を信ずる人達はごく／＼とGLAを脱退した。

誰かが高橋信次先生がお釈迦さまの生れ変りであつたことを記録して置かなければ高橋信次先生が説かれたことは断滅するという状態になつたのであつた。私が高橋信次先生をお釈迦さまの生れ変りであると信じているのには根拠がある。私が書き遺して置かなければ誰も書き遺す者はいないであろうと思つて私は書きとどめて置くことにしたのである。

高橋信次先生が亡くなられて四年になつた。GLAの混乱の原因はもはや知らない人はないであろうと思つていたのであつたが、札幌のKさんから電話をもらい、五月二十四日沖繩に行つてみるとまだまだ真相を知らない人が沢山いることにびっくりした。それらの人々に事の真相を知らせるために、また後世の人々の正しい判断の資料とするためにも事実として書き遺して置かなければならないと思つたのである。

GLA関西本部は五十四年一月私達のことを「ミカエル佳子先生の愛の大きさを知らないまちがつた人達だ」という声明文を印刷して出したのである。もし私がなにも書き遺して置かなかつたとしたら、これから何十年か何百年かして関西本部の声明文を見た人達は私達がまちがつていたのだという判断を下すことは間違ひはない。私達の立場をはっきり印刷物として残して置けばどちらが正しいか判断することができようであらう。

関西本部が、GLAを脱退した者達がまちがつているといふ声明を出したことに対して、私が反論と詰問状を関西本部の各支部長に出したら、理事や支部長達の中に「園頭先生はどこまで関西本部を叩けば気がすむのであ

ろうか」という人があったことを聞いた。私は関西本部の幹部の良識を疑うものである。最初に私達を叩き私達を悪いといったのは関西本部であった。関西本部が声明を出したからそれに対して反論をしたまでのことである。私が先に関西本部を叩いたことはない。

私が関西本部の各支部長に出した反論は、みなが示し合せて焼いてしまえば後世に残るのは関西本部が出した声明文だけになる。それではやはり公平な判断の資料にならないと思うのでこの機会に、いつまでも残るような状態にして置きたいと思つて関西本部のことも書いたのである。

私は後になって責任を取ることができないような発言は今までしたことはない。ところがGLA東京本部、関西本部の責任者達のこととは実によくくるくる変るのである。結局欺されるのは私である。だから私が「なぜ前言を翻してウソをいうのか」と追及すると一ぺんだつて「すみませんでした」と謝まることはなく「園頭先生はきびしい」とか「園頭先生は自分達を叩く」と私を悪いかのようになのである。だから後世の人にだけでなく現在の人々が正しく第三者の立場で判断されるためにも書いて置かなければならないと思つたのである。

この世の人達をごまかすことはできても、あの世の人達をごまかすことはできない。私はこの世とあの世とを通じて批判に堪え得るようなことを書いて置くのである。

この中で、もう一つ書いて置きたいことがあつたがそれは影響が大きいので今回は書かないことにした。あと二・三年すれば書いてよい状態になるであろう。その後書いても遅くはないと思つた。私はただ、正法はこうだということ主張するだけであるのであるが、私が主張することを私が攻撃するとか悪口いっているとかしか受取らない人達がある。その人達は実は反省しなければならぬ多くのものを持つていたので、私が主張することに對して良心の痛みを感じるからである。私は淡々として正法はこうであるということを説くだけなのであるから私が説くことによって心の痛みを感じるという人達は私が人を攻撃したり悪口いっているのだと考えないようにしてほしいのである。

私がある人に対して「感情的な涙を流して人の同情を買うような話は真の宗教とは無縁である。それは遊女が

客に嬌びを売って歡心を買おうとしていることと同じ心理であつて男子たる者のやるべきことではない」という話をしたら、その人が私に対して「園頭先生は人の心の中に土足で踏み込んでくるような人だ」と批判しているということを知ったが全く氣の毒なことである。

どんなに正しいことをいっても、聞く人の力量によつてはそれを悪口いつていう受取り方をする人が多い現在に於ては、もう一ついいたい書きたいと思つてゐることは割愛せざるを得ない。

高橋信次先生が釈尊であつたかなかつたかは「人間釈迦」をくり返しよんで頂きたい。私は私自身の体験の事案の上に立つて高橋信次先生が釈尊であつたことを信じてゐるのである。

(おわり)

追記

五十三年三月、GLAの最高メンバーである高橋一栄、小柴敏雄、佐藤要氏が福岡へ来られた時、私は佳子氏の靈能がウソであることを追及した。例えば、高橋信次先生は「心の発見」の中に、私を生んだ母は過去世に於てキリストを生んだマリヤですと書いていられる。ところが佳子氏は「私の母（一栄氏）がマリヤです」といつてゐるのである。私は一栄氏に「あなたは本当にマリヤであつたのか」と追及したら答えることはできなかったのである。

佳子氏が自分の母親に対して「あなたはわたしを生んだことに感謝しなさい」と大勢の前でいつたことはほとんど知らない人はいない。一方で親孝行の話をしながら、一方ではこんな親不孝をやつてゐるのは精神分裂である。

佳子氏をまねて、日本の子供達が自分の親に向つて「わたしを産んだことに感謝しなさい」といつたら一体どんなことになるのであろうか。

私は西日本各県の代表者がいる前ではつきり宣言したのである。

「あなた方がミカエル佳子氏を立てて行くというならそれでいいでしょう。私は高橋信次先生、そうして釈迦・キリストの教を立ててゆく。あなた達は非常に汚ない無記名の投書という手段を使って人身攻撃して中谷

義雄氏をやめさせた。その外でもそういうことをやっている。表面ではうまく取りつくろって、裏へ廻ると投書をさせて知らん顔をしているという。そうしていったことをいわないというような汚ないことをやらないうで、正々堂々と正面から論じて決着をつけるという方法をとったらどうですか。投書で人身攻撃をするということは良識あるものやることではないもつとも卑劣な行為ではないか。

一体どこに愛があるというのか。私は正々堂々とやる。

私は一人でいい。あなた達は佳子氏を先頭にGLAの講師は全部、結束して来て下さい。東京・大阪・福岡でどちらが正しいのか、会員全部を集めて正しく聞いてもらった上で、判断は会員にまかせるというのをしようではないか。あなた達は自分達が正しいというのであったら、それ位のことはできる筈である。」

ということを申し入れたのであった。その後も何べんも申し入れてあるのであるから、もし、GLAの会員でこの正法誌をよまれた方は、GLA本部に私と佳子氏との合同講演会の実現を申し入れていただきたい。

「釈迦・キリストの教が正しいのか」

「釈迦・キリストは人間が幸福になる法を説かなかったのであるか」

この問題は単にGLAにだけ関係することではない全世界の宗教界の大問題なのであるからこの合同講演会が実現する時には、日本の仏教界、キリスト教界にも呼びかけて、佳子氏の所説が正しいかどうかを聞いてもらうことにする。佳子氏は自らメシヤであることを名乗っているのであるから、そうして五年後（昭和五十二年に五年後といったのであるから既に三年過ぎてしまった、あと二年しかない）、世界の全人類は高橋佳子の下に集まるのであると宣言したのであるから、堂々と多くの人の前に立つべきであると思う。私が合同講演会をやって真を天下に問いたいと思っているのである。